

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 34

August, 2013

関西大学ニュースレター
発行日：2013年(平成25年)8月26日
発行：関西大学 広報室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>



新たな価値を創造し、 地域に活力を

■対談 多彩な人材の交流から、世界に「TOMOSROI」を発信
野村卓也 一般社団法人ナレッジキャピタル 総合プロデューサー
楠見晴重 学長

■リーダーズ・ナウ ー5
在学生ー 商学部 三谷真ゼミ
卒業生ー 大阪糖菓株式会社 代表取締役社長
野村 卓さん

■研究最前線
近代経済史の研究
地域産業の盛衰とコミュニティ ー7
政策創造学部 政策学科 ー 橋口 勝利 准教授
スピントロニクスの研究
電荷とスピンがもたらす物性の解明と応用 ー9
システム理工学部 物理・応用物理学科 ー 伊藤 博介 准教授

■トピックス [学内情報] ー11
関西大学カイザー・プロジェクト
建設業界の効率化に貢献する
汎用的な3次元CADエンジンを開発
ソシオネットワーク戦略研究機構が
文部科学省「共同利用・共同研究拠点」に継続認定
第36回総合関関戦開催
熱戦繰り広げ、親睦深める
初等部・中等部・高等部が「子どもの読書活動優秀実践校」として表彰
12年間の読書生活で知性と感性を育む

■社会貢献・連携事業 / 地域連携 ー13
吹田市と「災害に強いまちづくりにおける連携協定」を締結
地域防災総合訓練を千里山キャンパスで実施
広島県、香川県、徳島県と就職支援に関する協定を締結
U・Iターン就職支援を自治体と連携して
関西大学3キャンパスで
今年も市民参加のイベントを実施

■関大ニュース ー15
関西大学博物館「刀匠 河内國平作刀展」を開催 ほか

NOMURA TAKUYA



新たな価値を創造し、地域に活力を

多彩な人材の交流から、世界に「OMOSIROI」を発信

野村 卓也 ・一般社団法人ナレッジキャピタル 総合プロデューサー
楠見 晴重 ・学長

大阪都心の一等地、大阪駅北地区「うめきた」に、2013年4月26日、グランフロント大阪がオープンした。その中核施設ナレッジキャピタルは、「感性と技術の融合により、新たな価値を創出する」をコンセプトに、最先端の技術や研究に触れることができ、連日幅広い層の来場者でにぎわっている。世界に向けて成果を発信し、大阪の活性化を推進する強力な拠点として期待されるこの施設の総合プロデューサー・野村卓也氏と楠見晴重学長が今後の展望を語った。



The Lab. では最先端技術を体験できる

◆どこにもなかった知的創造拠点

楠見 ナレッジキャピタル開業は、たいへん大きな反響を呼びましたね。

野村 おかげさまでグランフロント大阪全体に非常にたくさんの方にお越しいただいて、ナレッジキャピタルにも幅広い層の方が来られています。ナレッジキャピタルはビジネスマンや研究者が対象と思われがちですが、実際にはお子さんや若い女性、シニアのご夫婦の来場も多くなっています。

楠見 このような施設は日本ではもちろん、世界を見渡しても例がないのでは？

野村 おっしゃる通りです。主な施設として、企業や研究機関が集積した「ナレッジオフィス」、企業間のコラボレーションを目的とした「コラボオフィス」や、さまざまな分野を超えた出会いと交流が可能な「ナレッジサロン」があります。そこで立ち上がったプロジェクトに基づき、作成したプロトタイプは「The Lab. みんなで世界一研究所」で展示し、消費者の反応を知ることができます。さらに具体的なものが出来上がれば、発表・披露ができるシアターやコンベンションセンターもあります。つまり、さまざまな人材が集まり、出会いからアウトプットまでワンストップでできる。このような拠点は世界でも他にはないだろうと思います。それも、ターミナル駅前の一等地で、一般

の方々が気軽に立ち寄れる場所にあり、商業施設も混在しているような拠点は無いはずですよ。

楠見 前例のないプロジェクトだけに、総合プロデューサーとしてのご苦労もあったのではないですか？

野村 私が総合プロデューサーになった時には、「感性」と「技術」を融合し「新しい価値」を生み出す知的創造拠点」といっても、どのような施設でどのように運営していくのかまだ漠然としていました。そこから、ナレッジサロン、ナレッジシアター、The Lab. という3つの直営事業の企画をまとめ具体化する一方、ナレッジキャピタルを知っていただくイベントを定期的に開催することで、賛同者を増やし、参画者の募集も行いました。その中で一番の苦労といえば、コンセプトや意図をなかなか理解されなかったことです。世界にも類のない試みだけに、何かを例に挙げて「あそこみたいなものです」という説明の仕方ができない。ピンとくる人は「面白い」と言ってくれたのですが、分からない人にはいくら言葉で説明してもさっぱり伝わりませんでした。

◆大阪の元気は民の力で盛り上げる

楠見 大正から昭和にかけて大阪は「大大阪」と呼ばれて、商業や紡績、医薬品などの産業が栄え、東京を上回る活気に溢れた時代がありました。その黄金時代、大阪では官ではなく民が主役でした。それが徐々に東京一極集中が進み、大阪は元気がな



「The Lab.」で大学における知の創造の成果を展示すれば、専門家だけでなく、一般の方にも知っていただけることにつながります。

「ここからスターを生み出し、世界に『OMOSIROI』を発信していきなさい」と考えています。



ナレッジキャピタルに開設された「関西大学うめきたラボラトリー」

野村 卓也 (のむら たくや)
1953年大阪府生まれ。76年関西大学文学部フランス文学科卒業。広告代理店勤務後、92年株式会社スーパーステーション設立。学生映像コンテスト「BACA-JA」、クリエイティブビジネスマッチング展示会「大阪創造取引所」などを企画・プロデュース。一般社団法人ナレッジキャピタルでは総合プロデューサーとして、コンセプト立案、施設企画、参画者募集計画などに開業前から携わる。株式会社スーパーステーション代表取締役社長。大手前大学メディア・芸術学部客員教授。関西経済同友会幹事、芸術・文化委員会委員など。

楠見 晴重 (くすみ はるしげ)
1953年大阪府生まれ。78年関西大学工学部土木工学科卒業。81年同大学大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。82年関西大学工学部助手。90～91年英国 Imperial College 留学。関西大学専任講師、助教授を経て、2002年教授。07年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に。09年関西大学学長に就任。公益財団法人大学基準協会理事、一般社団法人日本私立大学連盟常務理事、国土交通省道路防災ドクター、土木学会フェロー会員。主な共編著書に「地圏環境情報学 地下を診る最先端技術」「アジア古物語 京都一千年の水脈」など。

いと言われるようになりますが、大阪を元気にする核となるのは、やはり民だと思っています。大阪で生まれて大阪に育てられてきた本学も、民の力の1つとして貢献したいと願っていますし、ナレッジキャピタルにも大阪を元気にする核となって頑張ってもらいたいという期待を持っています。

野村 正にグランフロント大阪は民間主導のプロジェクトで、12社のデベロッパーが運営を行っています。その点も世界的に例が少ないといえます。オーストリアのリンツで毎年開催されている世界的なメディアアートの祭典を主催し、美術館や博物館機能を持つセンターやアトリエ、研究機能を持つフューチャラボを常設している「アルス・エレクトロニカ」の代表が先日来られましたが、彼が一番感心していたのもここが民間主導で運営されていることでした。

◆多様性が交錯する場から革新を

楠見 大学の役割を考える上で、重要なキーワードとして「知」があります。大学は知の継承、知の創造、知の循環を行っていかねばならない。その取り組みを社会に向けていかに発信していくかを考えたときに、幅広い分野の研究者やビジネスマン、一般の生活者が行き交うナレッジキャピタルは非常に面白い場所です。The Lab.で大学における知の創造の成果を展示すれば、専門家だけでなく、一般の方にも知っていただけることにつながり、これはとても楽しみなことです。

野村 展示ブースには展示内容を評価する「いいね!」ボタンのようなものを設置している企業もあるのですが、大阪の方はどんどん押していきます。これは、東京では考えられないことで、こんなに押されないようです。「悪い評価であっても、押しもらえることはうれしい」と研究者は話しています。そういう意味で、消費者の反応を見るには非常に良い場所のようです。企業の方も大きな期待を寄せられています。

楠見 ナレッジサロンは会員制ですね。どんな方が入会されているのですか？

野村 現在、会員数は約900人。開業時はThe Lab.の出席企業

の関係者などが中心でしたが、最近は見学に来られて気に入って入会される若いクリエイターや起業家が増え、会員の幅が広がっています。7階のナレッジサロン中央の大きなカフェラウンジも、席がいっぱいになるほど活況を呈するようになっています。

また、若手のクリエイターやスタートアップのベンチャー企業が入っているコラボオフィスは、オープンスペースで横のつながりを深めながら、実際に何かを生み出す場所として機能し始めています。

楠見 本学では4月に、学生が集まり、討論し、共同で発表するものを制作できる「コラボレーションコモンズ」というオープンスペースを千里山キャンパスの凜風館に開設しました。学生版のナレッジサロンやコラボオフィスといえるかもしれません。もし機会があれば、のぞいてみてください。

野村 「場」は重要ですね。自然な交流を育むことができる場があり、多様なものの考え方や、異なる世界にいる人達と出会うことが、イノベーションにとっては効果的だと思っています。

◆関西大学うめきたラボラトリーを開設

野村 関西大学がナレッジキャピタルに参加していただいたことは、私も関西大学OBとしてうれしいですし、非常にありがたいと思っています。大阪大学もそうですが、大阪に昔からある大学がここで活動し、さらに企業と一緒に新しいものを作り出していくことが非常に重要だと感じています。ナレッジオフィスに入居いただいた「関西大学うめきたラボラトリー」はどのようにお使いいただいていますか？

楠見 今、利用しているのは化学生命工学部と総合情報学部です。化学生命工学部は、不凍タンパク質研究の第一人者である生命・生物工学科の河原秀久教授が、学生も交えて企業と商品開発の課題についての会議などで利用しています。不凍タンパク質を利用することで冷凍食品を解凍したときの味の劣化を防ぐことができるなど、さまざまな効果が期待されているため、いくつかの企業が河原先生の研究に関心をお持ちになり、すで

に実用化に至った事例もあります。

総合情報学部は田中成典教授の研究室と本学発のベンチャー企業・株式会社関西総合情報研究所が連携して「Androidアプリ開発短期セミナー」を開催しています。関西総合情報研究所には社員として働いている総合情報学部の学生もいて、このセミナーでも活躍しています。学生にとっては学んだことを学外で活かしていくことが良い刺激になっているようです。

ラボラトリーでの活動は6月に始まったばかりで、今後、さらに産学官連携による研究事業の活性化と社会還元のために有効に利用していきたいと考えています。

◆世界と連携、世界に情報発信

楠見 関西大学では私が学長に就任してから、世界の大学との結びつきを深めていこうと、ここ数年はとりわけアジアのハブ大学を目指し、連携を強化してきました。ナレッジキャピタルもここで生まれた成果を海外に広めていくなど、世界を視野に入れておられると思います。具体的に海外との連携の取り組みなどを教えてください。

野村 グランフロント全体が、「アジアのゲートウェイ」を掲げています。ナレッジキャピタルでは、開業前からシンガポール、香港、台北、ソウルなどの都市と交流を深めていて、既に成果も実り始めています。

例えば、7月には「香港サイエンス&テクノロジーパーク」の代表が来られたのに続いて、「香港サイバーポート」の代表と入居企業5社が来られ、ナレッジキャピタルの参画者と一緒にセミナー、ディスカッションとビジネスマッチングを行いました。12月には希望者を募って、逆にこちらから香港を訪ね、プレゼンテーションをしようと計画しています。その後も交互に訪問し合い、年4回程度の交流を続けていこうと考えています。

また、フランスのリヨン市からも、市内にある駅前の再開発プランのために、市長一行が団体を視察に来られました。リヨンにはこちらからも数度訪問していて、将来的な連携を検討しています。SNS全盛の時代ですが、フェイストゥフェイスの交

流がやはり大事です。海外企業との連携を通じて、互いにマーケットを広げる道筋を作れたらと思っています。

楠見 それはぜひ、どんどん進めていただきたい。ここが活力ある大阪の1つの象徴的な施設として世界から注目されるようになれば、ナレッジキャピタルがあるから大阪を訪れようという観光の新しい切り口が生まれると思います。

◆ナレッジキャピタルはスター誕生のステージ

楠見 大学には教育機関として社会に有為な人材を送り出していくという役割があります。そのために、本学では自ら考え、行動できる人材を育成する教育を進めています。新しい産業・技術・文化・価値を創造し、関西から世界に発信することを目指しているナレッジキャピタルとしても、人材育成は大きな課題なのではないですか？

野村 そうですね。人材育成は大きなテーマとして取り組んでいます。その一環として、いくつかの公募のアワードを開催します。「インターナショナル・スチューデント・クリエイティブ・アワード (ISCA)」もその1つです。ISCAは、学生を対象にした映像コンテンツのコンテストで、国内と海外部門があり、国内にはモバイルアプリ部門もあります。海外は連携している香港やシンガポールを中心に応募を呼びかけています。関西大学の学生さんもぜひ、ご応募ください。

11月には受賞発表と上映会、イベントを実施し、アジアからも学生を招待して、学生クリエイター同士の交流を図り、入賞者には次の作品製作の機会を提供するなどして、新鮮なコンテンツを生み出す若い才能をここから育てたいという希望を持っています。

イノベーションというと技術革新のことを指すと捉えられがちですが、私たちはもう少し広く社会を変えて行くことと捉えて、あえてナレッジイノベーションという言い方をしています。ナレッジイノベーションとは、多様なアイデアによって世の中を変えていくことです。ナレッジイノベーションという言葉は少し難しい感じがするかもしれませんが、言い換えれば、「OMOSIROI」ことをやっていくことだと私たちは考えました。

今世界に通用する日本語といえば「モットイナイ」とか「カワイイ」がありますが、それに続く日本発の言葉として「オモシロイ」を私たちは押していこう、大阪から「OMOSIROI」ことをやっていこうと言っています。大阪ならば「OMOROI」ではないのかという議論もあったのですが、「オモシロイ」は漢字で書くと、「面」に「白」と書きます。「面」は「目の前」を表し、「白」は「パッと明るくなることを表します。つまり、「オモシロイ」とは「パッと目の前が明るくなる」とか、「心が晴れ晴れする」ことです。ナレッジキャピタルに来られたら、研究者でも、科学者でも、技術者でも、一般消費者でもパッと明るくなって、ヒントや気づき、ひらめきがもらえる場所になればいいなと思っています。

そして、ナレッジキャピタルからスターを生み出したい。スターは人でも、製品やサービス、企業であってもいい。ここからスターを生み出し、世界に「OMOSIROI」を発信していきたいと考えています。

LEADERS NOW!

復興商店街で フィールドワークを実施

学生が被災地にできることを追求



東日本大震災からもうすぐ2年半。復興への道のりはまだ遠いが、被災地では各所に仮設の店舗や商店街がオープンし、街の商業機能を取り戻そうと動き出している。商学部・三谷真准教授ゼミの3年次生4人が、その実情を自分たちの目と足で確かめようとしている。

●商学部 三谷真ゼミ
村井 亮太 さん
廣兼 里菜 さん
田中 奈々美 さん
小田 雅裕 さん
(いずれも3年次生)

三谷真准教授の専門は流通政策論。神戸、尼崎、守口、吹田、宝塚、伊丹などさまざまな都市の商業活性化計画策定にも関わり、指導するゼミの学生たちも関連する研究活動を行ってきた。

三谷ゼミの3年次生13人は、4班に分かれた班ごとにテーマを決め、小売業やまちづくりの調査・研究に取り組んでいる。その中で、第3班の4人が選んだテーマが「東北の仮設商店街の現状と課題」だ。

「東北に行きたいという気持ちがまずありました。でも、私たちに何ができるだろう？ 何をすれば良いのか分からなくて迷ってました」と振り返るのは、テーマを提案した田中奈々美さん。それに対して三谷准教授は「深く考えなくても、とにかく一度行って、うまいものを食べてくれば良い」と助言。悩むよりもまず行動を促すこのアドバイスに背中を押され、4人は「実際に被災地を訪れ、被害を受けた商店街の現状を知り、課題を見つけ、大学生として何ができるかを追求していく」と、グループワークの方向を定めて始動した。

三谷ゼミでは調査や机上の考察だけでなく、自分たちで考え、実際に企画・行動することを重視している。例えば、2011年から阪神尼崎駅近くの三和市场に2カ月に1度、ゼミ生による屋台を出し、店舗の運営、接客販売を体験している。普段はシャッターを下ろした店舗が目立つ市場の活性化のために、学生が自分たちで企画する実践的な研究活動だ。東北を訪問する4人も



2カ月に1度、尼崎の三和市场で屋台を出し実践的な研究活動を行う三谷ゼミ生たち



参加し、市場近くにある貴布禰神社の例祭で人出が多かった8月2日も、調理や接客にあたった。

こうして、商店街の難しさと楽しさを体験してきた4人は、夏休みの間4泊5日の行程で、被災地でのフィールドワークに向かう予定。レンタカーで「南三陸さんさん商店街」「石巻まちなか復興マルシェ」「陸前高田未来商店街」など、宮城県、岩手県の復興商店街9カ所を回り、聞き取り調査を行う。被害状況がそれぞれ異なる中での復興への取り組み方をまとめながら、地元産業の復興と商店街との関わり、復興商店街の取り組みをいかに全国に伝えていくかの方策について追求する。



「阪神淡路大震災を経験して、神戸市長田区の復興なども身近に見てきたので、その経験を東北でも生かす方法を探りたい」(廣兼里菜さん)。「人口の流出もあり、以前と同じ規模で復興するのが良いのか、店舗数を絞って集中させた方が効果的という議論もある。自分の目で見て考えたい」(小田雅裕さん)。また、リーダー役で現地ではドライバーも務める村井亮太さんは「支援物資が供給過剰になり、お金を使わなくても入手できるものが多いために、被災地で流通が機能していないことがあると聞いた。その実態を確かめたい」と話した。事前の調査を通じてそれぞれに異なる視点で関心を深めていた彼らが、東北でどんな出会いを経験し、何を発見し、考えを深めることができるのか、最終レポートの発表はこれからだ。

コンペイトウの伝道師

小さな砂糖菓子の尽きない魅力を広める

●大阪糖菓株式会社 代表取締役社長
野村 卓 さん 一商学部 1973年卒業

小さな角をたくさん生やした愛らしい金平糖を主力とする菓子メーカー、大阪糖菓は金平糖の可能性を広げる新製品を開発する一方、ミュージアムを開設し金平糖を通じて歴史と文化を伝えることにも貢献してきた。行動の原動力は野村卓社長の金平糖愛に満ちた熱意。熱意のあまり、彼は時空を超えて、時に南蛮人に変身する。



戦国時代にポルトガルから伝えられた砂糖菓子＝金平糖。明治の中頃には製造が機械化され日本中で広く親しまれるようになったが、今では国内メーカーは10社に満たないまでに減ってしまった。その中でも、関西大学商学部を73年に卒業した野村卓さんが社長を務める大阪糖菓(大阪府八尾市)は、年間約300トンを生産する元気な菓子メーカーだ。

同社では昔ながらの伝統を守り続ける一方、新発想のユニークな金平糖を次々と世に送り出して話題を呼んできた。細粒技術を駆使して造り上げた直径1ミリの「世界一小さなお菓子コンペイトウ」、宣教師から織田信長への献上品を復元した「信長の金平糖」、熱中症対策になる塩分を含ませた「塩金」、松茸風味の「松茸こんべい」など、どれも野村さんのアイデアから生まれたユニークな製品だ。中でも、金平糖の色彩に従来はなかった濃淡を付け、異なる色味を組み合わせ、アジサイの花に見立てた「あじさいの菓」は、同社の最大のヒットになった。

「こんなに可愛くて綺麗な金平糖を未来に残したい。その思いだけで続けてきた」と話す。新製品の開発だけでなく、金平糖の歴史の研究にも情熱を傾け、ルーツを求めて種子島やポルトガルまで赴き、『フロイス野村のコンペイトウ浪漫紀行』という著書にまとめた。また、金平糖の魅力を伝えようと、工場に隣接して、金平糖づくりも体験できる「コンペイトウミュージアム」を開設した。



コ ン ペ イ ト ウ 王 国



野村 卓—のむら たく
■1948(昭和23)年、大阪生まれ。大阪糖菓株式会社代表取締役社長。73年関西大学商学部卒。同年、大阪糖菓入社。93年より現職。著書に「フロイス野村のコンペイトウ浪漫紀行」(文芸社刊)

ミュージアムの案内は、野村さんを筆頭に社員が担当。野村さんは「大阪生まれのイチビリ精神」を發揮して、時にはコンペイトウ王国の王様・フラット野村に、またある時は、南蛮文化の伝道師・フロイス野村に変身。絵巻物に出てくるような南蛮人に扮装して、ユーモアたっぷりに金平糖の歴史や製法を解説する。ギターを弾いて、自作の金平糖の歌を披露することもある。このようなサービス満点の演出が人気となり、2003年の開館から10年、年間3万人が訪れる人気観光スポットになった。

学生時代は大学紛争の真っ直中、野村さんも若いエネルギーで盛り上がる最前線に飛び込んで行った。「授業も成り立たず、大学でもともに研究した記憶もありませんでした。今の大学生にはたくさん本を読むことを勧めたい。それができるのが大学の時期。そして、好きな道を選んで熱意で社会を突っ走ってほしい。私にとっては、社会人となってから読んだD.カーネギーの『人を動かす』との出会いが大きかった。そこに書かれていた熱意についての考えに共感した。水は80度や90度では水蒸気にならない。シュンシュンと湯を沸き立たせるような120度くらいの熱意を持たないと、状況は変わらないのです」

伝来400年以上も経つ金平糖の歴史に、熱意で新しいページを加え続ける野村さん。今年、65歳を迎え、次世代への事業継承の準備を進めながら、八尾、堺、福岡に開設したコンペイトウミュージアムの関東への展開を企んでいる。「大きくするというより、次の世代でも面白い会社であればいいなと思っています」。コンペイトウの伝道師の熱意はまだ冷めることはない。

■研究最前線

近代経済史の研究

地域産業の盛衰とコミュニティ

関西地域の活性化に向けた具体的行動の実践

◎政策創造学部 政策学科

橋口 勝利 准教授

丹念に資料を発掘し、明治から第二次大戦前までの繊維産業を調査した橋口勝利准教授が明らかにしたのは、戦前の地方企業の強さと産業の盛衰が地域コミュニティに与える影響の大きさだった。「関西地域の活性化に向けた具体的な実践」をテーマにゼミを指導。学生は地域の中に入り込み、多くの出会いを通じて、地域の活力を育てる難しさと楽しさを体験的に学んでいる。

■戦前の繊維産業における中小企業の力

——橋口先生のご専門の研究内容は？

近代日本経済史、特に明治後期から第二次大戦前までの紡績や織物などの繊維産業に着目して研究しています。ご存じの通り、戦前の国内産業の中で、繊維産業は中心的役割を果たしました。紡績は、ユニチカの前身である大日本紡績など大企業を中心でしたが、織物は愛知県の知多地方、大阪府の泉南地方など中小企業が非常に活発な産地があり、1930年代に日本の織物輸出が世界一になったときにも、その多くを中小企業が担っていました。現代でも日本は中小企業の力が強い国ですが、その強さは戦前からあったのではないかと関心を持ち、大学院生時代から一貫してこのテーマを研究してきました。

——地方の中小企業はどうやって競争力を付けたのでしょうか？

産地の中小企業の強さの理由として、1つは独自の技術を持っていたことが挙げられます。手の込んだ技術を取り入れることで、大企業が真似できない製品を作る能力を持っていました。もう1つはその地域の商人の存在です。商人がニーズを的確に判断しながら市場の情報を産地の生産者に伝えると同時に、その産地の中小企業にそれぞれ特徴に応じた商品を発注していました。地方の中小メーカーは名古屋や大阪など大消費地の商人の言われるがままに製品を作っていたというイメージがあるかもしれませんが、地域の商人が中小企業の力を把握しながら分散的に仕事を与える、先進的な下請け制度を既に持っていて、それが産地の競争力となっていたのです。

——戦前の地方・中小企業の調査はどうやって行うのですか？

地域の商店に調査に赴き、資料を読ませていただくのですが、廃業されている会社も多く、当主だった方のお宅を探して残っていた帳簿を見せていただいたりしています。この研究で一番難しいのが資料にアクセスすることです。「よく分からない若いやつには資料を見せられない」と電話の段階で断られることも



戦前の時代を生きた人々の在りし日の姿を感じられる地方・中小企業の調査資料▶▶

ありますし、インタビューの途中で追い返されたこともありましたが、そのような方に限って、通い詰めて信頼を得るととても力になってくださって、大量の貴重な資料を「あなたに全部提供します」と預けてくださったりしました。

地域産業の発展を知ることも大事ですが、その時代を生きた方々の在りし日の姿を記録から明らかにすることも研究の喜びです。資料との出会いや、その資料を貸して下さる方との出会い。さまざまな出会いやつながりから、研究は当初には思いもよらなかった広がりを得ることができました。

■学生による地域活性化活動を実践

——ゼミの活動も教えてください。実践的な活動をされているそうですね。

私のゼミのテーマは「関西地域の活性化に向けた具体的行動の実践」。1学年20人程度の学生が4班に分かれ、フィールドワークのスタイルで地域活性化に向けた活動に取り組んでいます。

繊維産業、地方の中小企業について調べていると、100年前の日本は確かに中小企業を中心で、地域が元気な時代だったことが分かります。しかし、繊維産業が斜陽化し地域の産業が衰

退すると、その地域自体の元気がなくなってしまいます。それだけではなく、地域の核となる産業がなくなると、地域のつながりまでも失われてしまいます。それに対して何か具体的な行動をすべきだという私自身の問題意識が、ゼミのテーマに反映されています。

ゼミの学生は京都・伏見区、大阪・池田市などに出かけ、地域の人と接しながら、その方々の悩みやニーズを聞いて問題点を明らかにし、地域を活性化するための提案を行い、具体的な行動につなげています。

——どのような地域活性化活動をしているのですか？

京都伏見班では齋藤酒造という蔵元から、「若い人に日本酒に親んでもらうための企画を提案してほしい」という要請をいただいて、学生が利き酒イベントを3年連続で企画・実施しました。年々参加者は増え、今年は300人を越えました。また、今は新商品の開発にも協力させていただいています。

池田市では2つの班が活動しています。1つの班は細河という植木の産地で有名な自然豊かな地域の観光活性化のために、地域のコミュニティ推進協議会と連携してウォークラリーを毎年企画・実施しています。学生がコースを考え、炭焼き体験、古いお寺の特別公開、地域の合唱団による歌など、ポイントごと

のイベントを企画・運営しています。

もう1つの班は、池田市内の小学校で環境出前授業を年間5回程度行っています。4年生の総合授業として行われるこの出前授業では、学生がファシリテーターとなって、環境を守るために何をすれば良いか子供たちに考えてもらい、実践した活動を市のエコ活動報告会で発表するところまで1年間をかけて行っています。子供たちは、校内の無駄な電気を消す電気パトロール隊を結成したり、廃油の回収に協力したり、給食の残飯を減らす活動などを行っています。残飯の減少率は市内の小学校で一番になりました。

■福島県の被災地を学生と訪ねる

——もう1つの班の活動内容は？

もう1つの班では、東日本大震災で被災した地域への調査活動とボランティア活動、そこで見たものを関西で伝えるという活動を行っています。この班は2011年6月に被災地に初めて訪れ、福島県の福島、郡山、南相馬の3市で活動しています。

福島市では仮設住宅を訪問し、足湯マッサージを提供して、いろいろな話を聞かせてもらいながら避難者の方に少しでも元気になっていただこうという活動を福島大学の学生としてしています。

南相馬市では、小学校の体育館で、大きな取り札を使ったカルタ大会を企画して行っています。カルタは池田市の幼稚園児と一緒に作ったもので、読み札の文面が子供たちへの励ましのメッセージになっています。これを学生が読み上げると、子供たちが取り札に向かって走り出します。カルタ大会は、運動場が思うように使えない子供たちに体育館の中で元気に走り回ってもらおうという企画でもありました。これらの活動を通じて見聞きしたことは本学の市民講座などで報告しています。

——今後の抱負をお願いします。

今の日本の産業は、自信をなくしているのではないのでしょうか。歴史研究者としては、日本が地域の内的な力で発展してきたということをもう一度発信していきたいと考えています。

地域活性化は言葉で言うのは簡単ですが、どの地域でも共通する処方箋があるわけではないので難しい。ゼミ活動については、学生が地域にお邪魔させていただくことで、地域の皆さんの活力につながることを期待しています。学生たちは活動を通して、人生の生き方や働く軸を、地域の方々から学ばせてもらっています。こうした活動をしているとつくづく感じますが、教育者である自分が成長しなければ学生も成長しません。教育者としても成長できるよう、研究活動に取り組んでいきたいと思っています。

Seminar

京都・伏見
京都市伏見区での利き酒イベント

池田
池田市内の小学校での環境出前授業

池田・細河
池田市細河地区でのウォークラリー活動

福島・南相馬
福島県南相馬市でのカルタ大会

研究最前線

スピントロニクス研究

電荷とスピンのもたらす物性の解明と応用

材料探求・計算機シミュレーション

システム理工学部 物理・応用物理学科

伊藤 博介 准教授

物質の中で電荷とスピンを持った電子がどのような運動をしているかによって物性は決定される。電子のスピンは小さな磁石と考えれば理解しやすい。物性理論研究室の伊藤博介准教授は、

スピンを用いるスピントロニクスという新たな研究分野で、これまでにない物理現象の探索とその解明、さらに、新機能デバイスの開発など実用的な技術への応用に向けて、理論物理学的な手法と計算機シミュレーションを用いて取り組んでいる。伊藤准教授を動かすのは、まだ誰も見つけていない問いの答えを見つけ出すことに楽しさを感じる先駆者の心だ。

◀「スピントロニクス—基礎編—(現代講座・磁気工学3)」井上順一郎・伊藤博介 著/共立出版(2010年)



スピントロニクスの世界へようこそ

—先生のご専門のスピントロニクスはどのような研究をする分野ですか？

エレクトロニクスという言葉は皆さんご存じだと思いますが、エレクトロニクスの主役である電子には電荷とスピンの2つの性質があります。スピンは簡単に言えば、小さな磁石と見なすことができます。スピントロニクスはエレクトロニクスの世界に磁石を取り入れたら、何か新しい物理現象を見つけられないか、その現象を利用して新しい機能を持ったものを作れないだろうか、といった研究をする分野です。スピントロニクスの研究成果は身近なところでは、ハード・ディスク・ドライブの読み取りヘッドに応用されています。あるいは、研究を応用した不揮発性メモリの一つである高速磁気メモリ「MRAM」の開発も現在、世界中で盛んに行われています。



—物性理論研究室では、実験はされないのですか？

私の研究室は理論の研究室ですので実験は行わないのですが、実用につながる研究をできるだけやりたいと考えているので、常に実験を行っている研究グループと共同研究をしています。例えば実験グループから「こんな実験結果が出たが、なぜこうなるか分からない。分かればもっといいものが作れる」と相談を受けて、その問題について考えます。また、実験前に理論的に予測を立て、「こうすればいい」とこちらから提案することもあります。この2つが共同研究における私の主な役割で、理論的に考えるだけでなく、計算機シミュレーションを用いて課題に取り組んでいます。

超高速磁気メモリの開発

—具体的にどのような共同研究に関わられているのですか？

スピントロニクス研究の応用では、電子のスピンをどれだけ効率よく作るかということが求められています。それには材料開発が必要です。例えば、鉄、マンガン、シリコンからなるホイスラー合金がスピンを作るために効率の良い物質の1つですが、この物質は、室温つまり300K(ケルビン)、摂氏に直すと約27°Cより高い温度になると磁石の性質がなくなってしまうので実用には適していません。一方、鉄とシリコンからなる別の合金は、スピンを作ることで少し劣るけれど、もっと高い温度まで磁石の性質を保ちます。そこで、それぞれの良い部分を取り入れるため、元素の組成を変えて計算機シミュレーションを行い、より良い材料となる物質を予測して、実験を行う先生方に提案しています。これは、独立行政法人科学技術振興機構の戦略的創造研究推進事業「CREST」に採択された「電荷レス・ス

Spintronics

ピン流の三次元注入技術を用いた超高速スピントロニクスデバイスの開発」チームの一員として取り組んでいるものです。

また、文部科学省の「元素戦略プロジェクト」に採択された「複合界面制御による白金族元素フリー機能性磁性材料の開発」にも共同研究として取り組んでいます。

スピンには上向きスピンと下向きスピンがあり、通常は双方の数が同じですが、上向きスピンの方が多くなると上向き磁石になり、下向きスピンが多くなると下向き磁石になります。上向き磁石を0に下向き磁石を1に対応させ、磁石の向きをひっくり返すことで情報処理を行うのが先に紹介した高速磁気メモリ「MRAM」です。磁石の向きをひっくり返す方法は、近くに電流を流して磁場を作る方法がありますが、メモリの大容量化には無理があります。現在、研究が進んでいるのが磁石に反対向きのスピンを入れて、ひっくり返す方法で、これをスピン注入磁化反転と言います。効率よく作ったスピンをできるだけ少ない量注入することで磁石の向きをひっくり返せば、反転時間が短く、高速動作し、消費電力も少なく済みます。このテーマに関するシミュレーションも行っています。

● 電流、スピン偏極電流、純スピン流

	電流	スピン流
通常の電流		0
スピン偏極電流		
完全スピン偏極電流		
純スピン流	0	

通常の電流は、上向きスピン電子と下向きスピン電子の流れる量が同じ。一方、スピン偏極電流は両者の量が異なる。特に、ハーフメタル磁性体を用いて作られる完全スピン偏極電流は、一方のスピンが流れない。さらに、電荷の流れは無く、スピンだけが流れる純スピン流も提案されている。

● 超高速磁気メモリ「MRAM」を構成するビット素子

高速磁気メモリ「MRAM」は、強磁性トンネル接合が基盤の目に並んだものである。強磁性トンネル接合とは、絶縁体薄膜を強磁性体で挟んだものであり、強磁性体の磁石の向きが平行か反平行かでビット「0」あるいは「1」を表す。ビットの読み出しには、トンネル磁気抵抗効果を利用する。

世界で最初の「分かった！」の快感

—実験に直接関わることはないとなると、研究はどのような方法で行っているのですか？

ノートとコンピューターです。数式の計算などは手書きの方が早いので、A4のノートに鉛筆で手書きしています。私が大学

の2年次生のころに、スピントロニクスの研究が活発になるきっかけとなった巨大磁気抵抗効果が発見されて、私は卒業研究のテーマにそれを取り上げた時から、ずっとこの分野の研究をしてきました。ですので、学生時代から今まで約25年間ノートに手書きのスタイルでやってきました。ノートは学生時代から、当時の文献と一緒に全て保管しています。昔に計算したものや、取り扱っていた材料が今になって注目されることもあり、古いノートを見直すこともあります。

—スピントロニクス研究の進展スピードは速いのですか？

スピントロニクス研究では、次々と新しい材料が実験的に作られ、新たな物理現象も見つかっています。研究者としては世界中から出てくる新しい研究成果を自分の研究に取り入れていかないと通用なくなってしまいます。ただし、それらの発見が10年後も残っているかと言われると、それは分かりません。ある現象が根本にあることが明らかになり、それですべて説明できるとして統合されてしまうかもしれません。

—世界の研究者との間で競争はあるのですか？

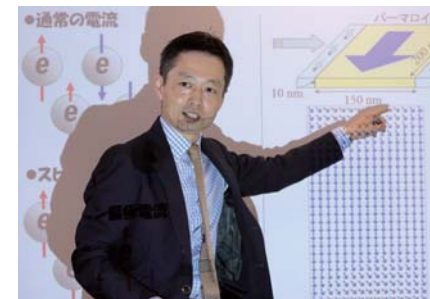
実験の研究者と一緒に、「これはかなりインパクトがある研究だから、データをきちんと取ろう」と丁寧に行っている間に、他の研究者に先を越されたことがあります。それも、自分たちよりも良いデータを出してくれれば、まだ納得できたのですが、それほど良くないデータだったので歯がゆかったです。後でこちらがより良いデータを発表しても、最初に発表したもののほどの反響がないですから。

—どうして、理論物理研究の道を選ばれたのですか？

大学3年次生のころは、私も大学院を修了して企業で研究開発するのだろうと思っていました。企業に行ったら理論研究はきっとできないだろうから、卒業研究では理論が勉強できる研究室へ行こうと決めたところ、そこでの研究が面白くて、そのまま理論研究を続けることになりました。まだ多くの人が研究していて答えが出ていないことについて「これで説明がついた」と分かった時には、「ひょっとしたら世界でこのことを分かっているのは自分だけではないか」と感じる瞬間があります。理論物理のそのようなところに魅力を感じたのだと思います。

—スピントロニクスの魅力を教えてください。

スピントロニクスは磁気工学と電子工学が融合した、いまだに未知のことが多い世界です。これから次々と面白いことが起こるだろうし、将来の生活を変えてしまうような役立つことが見つかる舞台です。エレクトロニクスは私たちの生活になくてはならないものになっています。同じようにスピントロニクスが、私たちに欠かせないモノを生み出していくのではないかと、その大きな可能性が魅力だと思います。まだ明らかにされていないこと、分からないことが多い点にも私は魅力を感じています。誰も予想しなかった物理現象や小手先のことでない、誰も思い浮かばなかったものを創り出していきたいと思っています。



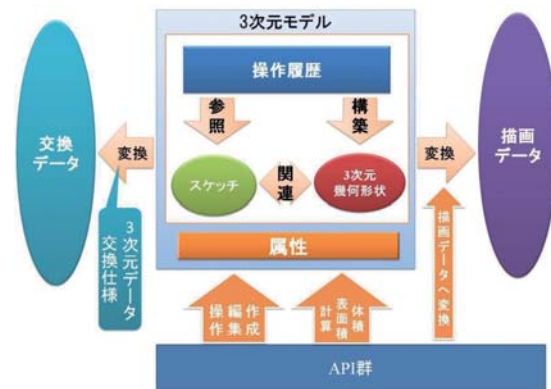
Topics ■トピックス [学内情報]

関西大学
カイザー・
プロジェクト

建設業界の効率化に貢献する汎用的な3次元CADエンジンを開発



■ 3次元CADエンジンの全体像



総合情報学部の田中成典教授を中心に、三菱電機株式会社、富士電機株式会社、日本工営株式会社、株式会社建設技術研究所など民間企業9社が参加し、2008年から産学連携で研究活動を行ってきた「関西大学カイザー・プロジェクト(社会基盤情報に関する社会連携プロジェクト)」が、建設業界全体で汎用的に利用できる3次元CADエンジンを開発した。



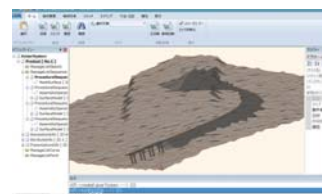
総合情報学部
田中成典教授

現在、国内で使用されている3次元CADは海外製が主流だが、海外製はライセンス料が高いなどの難点もあり、日本の建設業界の文化や実情を反映し、かつ低価格の製品が求められて

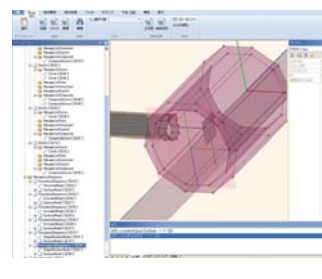
いた。このような要望に応えるべく開発された3次元CADのコア・エンジンによって、多くの国内のCADベンダーが、低コストで3次元CADの開発にチャレンジできる環境をつくり出すことができる。国産の3次元CADが普及することで、これまで不可能とされてきた建設前の仮組み立てが、3Dコンピュータグラフィックスで可能になり、複雑な地形、河川の堤防モデルの立体的再現や、施工工程のシミュレーションなどで大幅な効率化、低コスト化が期待される。また、地上の構造物を地中化した場合の新たな都市空間をシミュレーションすることも可能で、さまざまな応用の可能性が広がる。

今後は、国内の建設業界への3次元CADの普及を迅速に進めるために、本学発のベンチャー企業である株式会社関西総合情報研究所を通じて、2014年度からCADベンダーなどに対する販売を開始する予定。販売開始に先駆け、全国の約300の大学や高校、高等専門学校向けに、3次元CADエンジンを搭載した簡易3次元CADの無償提供も行う。

▼ 点群データによる地形上の道路の作成



▼ 3次元物体同士のブリーアン処理



第36回 総合関関戦 開催

熱戦繰り広げ、親睦深める



開会式の様子

関西大学体育会と関西学院大学体育会による伝統の交流戦「総合関関戦」が、6月13日～15日に開催された。

総合関関戦は両大学の体育会が良きライバルとして対戦し、親睦を深めることを目的に1978年から毎年開催。36回目を迎えた今年は、全体テーマ「PROVE ～ 感意昇心を胸に～」の下、関西学院大学上ヶ原キャンパスを中心に熱戦が繰り広げられた。

総合成績は関西大学の13勝19敗3分けて関西学院大学の5年連続勝利。通算成績は関西大学の16勝19敗となった。

また、6月15日には、「第34回大島鎌吉記念健康マラソン大会」が同時に開催され、関西学院大学時計台前からスタートし、上ヶ原キャンパス周辺を巡って戻るコースを、両大学の学生・教職員等約300人が快走した。



5年ぶりに勝利した剣道部



10年連続で勝利したアイスホッケー部



10年連続で勝利した射撃部

写真提供：関大スポーツ編集局

写真提供：関大スポーツ編集局

● 初等部・中等部・高等部が「子どもの読書活動優秀実践校」として表彰 12年間の読書生活で知性と感性を育む



「平成25年度子どもの読書活動優秀実践校」として、関西大学初等部・中等部・高等部が選出され、4月23日の「子ども読書の日」に東京で行われた「子どもの読書活動推進フォーラム」において、表彰状が授与された。

この表彰は子どもの読書活動の推進において、特に優れた取り組みをしている学校等を文部科学大臣が表彰するもの。今年度は全国で高等学校34校、中学校29校、小学校70校、特別支援学校4校が表彰された。

初等部・中等部・高等部では、一貫教育の中で「読書生活をデザインする力」を育む読書教育を展開。12年間を見通したシラバス作成により各校種に応じた系統的な読書活動が可能になり、初等部では読書量の充実、中等部では読書の質の向上、高等部では読書生活のデザイン力向上を図っている。

また、それらの読書教育を支える施設として、ライブラリー(図書館)も充実。初等部ライブラリーは読書センターとしての「わくわく館」と学習センターとしての「はてな館」に分かれ、「わくわく館」には読みたい本を、「はてな館」には知りたいと思う本を配架。2012年度には両館合わせて年間5万冊を超える本



図書の授業風景(初等部)

を貸し出した。

中等部・高等部のライブラリーには、読書に慣れ、多読することに適している新書レベルから、主に高等部の生徒が卒業研究に使う専門書レベルまで各種そろっており、読むことである「読書活動」だけでなく、書くことである「言語活動」の育成にも寄与している。

RISS ソシオネットワーク戦略研究機構が 文部科学省「共同利用・共同研究拠点」に継続認定

ソシオネットワーク戦略研究機構(英文名称Research Institute for Socionetwork Strategies 略称RISS)が、文部科学省「共同利用・共同研究拠点」の継続認定を受けた。認定期間は2013年4月1日から2019年3月31日の6年間。

文部科学省「共同利用・共同研究拠点」は、個々の大学の枠を超えて、研究者が研究施設や資料・データなどを共同利用し、共同研究を行う体制を整備するもの。RISSは、2008年度から文部科学省「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業(2010年度からは特色ある共同研究拠点の整備の推進事業)」に採択されたことを受けて、同年7月に本学の5

番目の附置研究機関として設置され、同年10月には私立大学初の「共同利用・共同研究拠点」の1つとして認定された。

RISSは高度な情報通信技術を活用したネットワーク戦略の総合的政策研究を行い、日本を含む世界が直面している社会的課題の解決のための学術的基盤を形成することを目的としている。

2013年3月31日まで、ウェブアンケートの駆使、データマイニングツールの活用、人工知能を用いたシミュレーションの実施で高い成果を達成し、今回、継続認定となった。今後も文部科学省の事後評価結果を踏まえ、共同利用・共同研究拠点として研究分野の発展に取り組んでいく。

社会貢献・連携事業 / 地域連携

◎吹田市と「災害に強いまちづくりにおける連携協定」を締結

地域防災総合訓練を千里山キャンパスで実施



ダンボール製簡易ベッド組み立ての説明



(左上) 炊き出し訓練の様子
(右上) 避難所設営訓練でダンボール製簡易ベッドを設置した様子
(左下) 野外のバス・シャワーシステム

5月10日、関西大学と吹田市による「災害に強いまちづくりにおける連携協定」の調印式が、吹田市役所で行われ、池内啓三・関西大学理事長と井上哲也・吹田市長が出席した。

この協定は2004年に両者が結んだ「関西大学と吹田市との連携協力に関する基本協定書」に基づき新たに締結するもので、相互に連携して災害に強いまちづくりを進め、災害に対する予防や災害発生時における応急対策を行い、地域社会と学術研究の発展に寄与することを目的としている。



また、5月18日には協定締結を受けた最初の具体的な取り組みと

◀「災害に強いまちづくりにおける連携協定」を調印する井上哲也・吹田市長(左)と池内啓三・関西大学理事長

して、吹田市地域防災総合訓練が関西大学千里山キャンパスで実施され、避難所設営訓練や避難所環境改善シンポジウムが行われた。

東日本大震災など過去の災害の教訓から、避難所の環境改善が重視されている。避難所設営訓練では、本学学生が吹田市職員、市民の地域防災リーダーとともに、長期間の雑居寝による血栓症等の健康被害を軽減する目的で採用したダンボール製簡易ベッドの組み立て・設置、救援物資搬入、炊き出しなどの作業を実際に体験した。

その後開かれた避難所環境改善シンポジウムでは、本学社会安全学部の菅磨志保准教授、越山健治准教授をはじめ、学識経験者や災害医療の研究者、震災後の医療活動等で活躍された医療関係者などを招き、講演やパネルディスカッションが行われた。

なお、このシンポジウムの模様は、岩手県大槌町仮設住宅、佐賀大学、新潟大学の会場と結んでインターネット中継された。

◎広島県、香川県、徳島県と就職支援に関する協定を締結

U・Iターン就職支援を自治体と連携して

関西大学と広島県、香川県、徳島県は、地域経済を支える人材の育成・確保に向けて、大学と各自治体が連携・協力して学生の就職活動を支援することにより、U・Iターン就職の促進を図ることを目的に、「就職支援に関する協定」を締結。4月16日に本学千里山キャンパスにおいて広島県と、4月19日には香川県と徳島県それぞれの県庁で、楠見晴重学長と各県の知事が出席して調印式を行った。

本学としては初めてとなったこの協定の主な内容は、学生や保護者に対する県内の企業情報や各種イベント等の周知、合同企業説明会等の学内での開催、学生のU・Iターン就職に係る情報交換及び実績把握、各県におけるU・Iターン就職活動の支援、そ

の他、学生のU・Iターン就職促進、などに関する事。

関西大学では2012年度学部在籍者約28000人のうち、近畿圏以外の出身者は5000人以上に上る。本学キャリアセンターでは従来より、地方自治体の関係部署担当者や地元就職媒体業者及びUターン就職を選択した内定者の話を聞くことができる「U・Iターンセミナー」や首都圏、近畿圏以外の地方の企業を招いた「全国有力企業研究会」などを実施し、U・Iターン就職の支援に積極的に取り組んでいる。



▲湯崎英彦広島県知事(左)と楠見晴重学長

関西大学3キャンパスで今年も市民参加のイベントを実施

高槻キャンパス

学生と市民が多彩な催しで交流

総合情報学部祭典実行委員会が企画・運営する高槻キャンパス祭が、5月26日に開催された。19回目を迎えた今年のテーマは「Colorful!!」。学生による模擬店や研究発表、市民の方々も参加したフリーマーケット、演奏・ダンス・お笑いなどのステージ企画、応援団による演奏・演奏が行われた。

また、フットサル大会、総合情報学部ならではのスタジオイベント「謎解きバトル!! ~リドル街に隠された秘宝~」、荻野正樹・総合情報学部准教授による講演「ロボットを通じて人間を知る」など多彩な催しが行われ、本学学生同士だけでなく、地域の方々との交流の場として、終日大いに盛り上がった。



高槻ミュージズキャンパス

第2回安全フェスティバルを開催 体験型企画が充実

社会安全学部がある高槻ミュージズキャンパスでは6月16日、「Safety for you! 学ぶ? 今でしょ!」をテーマに、社会安全学部祭典実行委員会が企画・運営する第2回安全フェスティバルが開催された。

当日は自衛隊や献血車を招いてイベントが行われ、耐震実験、断層実験など自然災害に関するミニ実験コーナーや防災に関するクイズ、水消火器体験、AED講習会、消防ポンプのデモンストレーションなど、来場者が体験を通じて安全についての知識を深められる企画が充実。今年は新たに初等部の児童による家族の似顔絵が展示され、会場を盛り上げた。安全・安心なまちづくりに役立つ情報が満載の社会貢献型都市キャンパスらしいフェスティバルとなった。



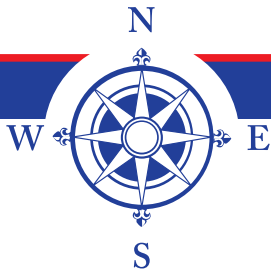
堺キャンパス

学部開設4年目 全学年が揃った初の祭典

今年度、完成年度を迎えた人間健康学部がある堺キャンパスでは、6月23日、「第3回堺キャンパス祭~FULL SOUL ついに揃った人健魂!!~」が開催された。

人間健康学部祭典実行委員会の学生が中心となり、応援団の演奏をはじめとするステージ企画や、子供向けスポーツふれあい広場、模擬店などで堺キャンパス祭を盛り上げた。また、地域の方々が出演するダンスステージ、堺警察署と学部教員による護身術セミナーなど盛りだくさんの内容に、親子連れをはじめ、約1700人の地域住民の方々が堺キャンパス祭を楽しんだ。地域とのつながりや支え合いを学部教育に生かす人間健康学部らしいキャンパス祭となった。





関西大学博物館 「刀匠 河内國平作刀展」を開催



千里山キャンパス関西大学博物館で、6月3日から7月20日まで、平成25年度企画展「名刀にかける 刀匠 河内國平作刀展」が開催された。

本学出身の刀匠・河内國平氏(1966年法学部卒)は、在学時に考古学者・末永雅雄教授(のちに名誉教授)の薫陶を受け、鍛刀の道に入ってから、宮入昭平氏、隅谷正峯氏の2人の人間国宝に師事。現在は奈良県吉野郡東吉野村に鍛

▲企画展のポスター
 刀伝習所を構えている。鍛刀にとどまらず、日本の刀剣文化の研究にも力を注ぎ、国宝七支刀、藤ノ木古墳出土刀剣の復元委員も務めた。

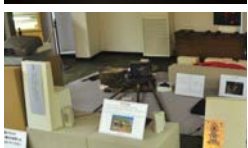


▲復元古代刀剣を見る来館者

同展では、河内氏の鍛刀の精華と復元刀など古代刀剣研究の成果を展示。6月30日には作家でエッセイストの阿川佐和子氏、7月13日には漫画家の日笠優氏を招き、河内氏とのトークセッションが行われた。



▲太刀と拵



作刀場の再現展示▶

小・中・高校生向け夏休みセミナーを多数開催

関西大学では夏休みの小・中・高校生向けに、今夏も多様なプログラムを提供した。

社会連携部高大連携センターは、体験的な学びを含む2日間の公開講座型「Kan-Dai3セミナー」を3講座、大阪中学生サマー・セミナー推進協議会が大阪府下の中学生を対象に行う「大阪中学生サマー・セミナー」では7講座、理工系3学部が小中高生対象に行う第14回サイエンスセミナーでは8テーマ11コースを実施した。また、関西大学博物館は万葉書作家・鈴木葩光先生を迎えて「筆とあそぼう！「夏の思い出づくり」」や、「なんでも相談会」を開催。他に、日本学術振興会が進める「ひらめき☆ときめきサイエンス」では、本学の科研費の研究成果を分かりやすく発信する5つのプログラムを実施。本学と大阪医科大学、大阪薬科大学による「医薬薬連環科学教育研究機構」では「ワクワク夏休み科学実験」を開催した。



写真は2点とも「なんでも相談会」の様子

ハンドボール部男子、44年ぶりリーグ優勝



体育会ハンドボール部男子(写真提供：関大スポーツ編集局)

体育会ハンドボール部男子が、4月6日から5月12日まで行われた平成25年度関西学生春季リーグ戦で見事に優勝を飾った。これは、88季、44年ぶりの快挙、通算5回目の優勝となった。

5月11日、負ければ4チームが同じ勝ち点で並ぶ可能性もあった、同志社大学とのリーグ最終戦を28対21で勝利。最終成績を6勝1敗、勝ち点を12まで伸ばし、勝ち点10で並んだ3チームを抑えて栄冠を勝ち取った。

なお、主将の佐竹崇文さん(商4)、白井翔さん(人3)、川崎凌さん(人4)がベストセブンに選出され、川崎さんはリーグ最優秀選手にも選ばれた。

関西大学は、今年も大阪マラソン2013を応援します



ランナー盛り上げ隊として活躍した応援団(昨年度の様子)▲

10月27日、今年で3回目となる大阪マラソン2013が開催される。大阪府・大阪市などが主催し、出場ランナーには定員3万人の5倍以上にあたる15万1410人の応募があった。関西大学は2011年の第1回から大会運営などに協力し、地元「大阪」を盛り上げるためにさまざまな形で貢献してきた。今大会も給水ボランティア420人をはじめ、応援団バトンチアリーダー部などの学生が沿道の観客と共に声援を送り大会を盛り上げる。また、第1回から続けている調査研究も実施予定で、さまざまな角度からの分析が進められている。

大会直前の25・26日にインテックス大阪で開催される「大阪マラソンEXPO 2013」では、人間健康学部の教員・学生らが「インターバル速歩」を紹介する予定だ。大阪マラソンを盛り上げるとともに大阪の都市の魅力を発信するこのイベントには、出走受付を済ませたランナーはもちろん、一般の方でも楽しめるように企画されており、ぜひ、足を運んでもらいたい。